

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：33113

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320083

研究課題名(和文) 言語の普遍性と個別性を考慮した言語障害の症状の解明とそのセラピーの探求

研究課題名(英文) Elucidation of the symptoms of speech disorders from linguistic universality and diversity and Research on therapy

研究代表者

氏平 明(Ujihira, Akira)

新潟リハビリテーション大学・医療学部・客員教授

研究者番号：10334012

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：吃音研究は吃音と非吃音の判別に新エビデンスを加えた。呼気の喉頭制御不全の有無と吃音者の神経機構と脳機能の特徴である。また日英語で幼児吃音と非吃音の診断指標が異なる事を明らかにした。吃音セラピーでは直接的言語指導を見直し、吃音の多面的モデルを紹介し検討した。それらと先行研究から評価・セラピーモデルの骨子を構築した。構音障害では、日本語の音韻素性と非線状音韻論の理論を症状分析に導入し、セラピーの方向性を示した。

研究成果の概要(英文)：There were findings on difference between stutterers and nonstutterers. The first was laryngeal control on breath. Stutterers' were unstable. The second was the brain activation which suggested that stutterers could not read syllable sequences efficiently. The third was what diagnostic guidelines for children's stuttering are different between Japanese and English. As for the treatment, the direct method was checked, and CALMS model was introduced and examined. We framed the model of assessment and therapy with the fruits of previous studies and this research. Phonological features and the theory of nonlinear phonology was brought in the analysis of the functional misarticulation, and a course of the therapy came to light.

研究分野：言語学、音声学

キーワード：吃音 吃的非流暢性 機能性構音障害 言語の普遍性 言語の個別性 音韻素性 非線状音韻論 CALMSモデル

1. 研究開始当初の背景

(1) 吃音はわかっているところとよくわからないところがある。疫学的研究では、発症率が人口の 5%で有症率が人口の 1%と言われている。それなら吃音は発症しても 80%は自然治癒することになる。その背景は不明で、吃音の類型も明確ではない。ただ幼児期から学童期、成人へ発展していくのが、有症率 1%の発達性吃音と言われている。

(2) 吃音症状の中核は、語句の要素の繰り返し、引き伸ばし、そして語句開始直前や語中の阻止である。それらは幼児期には、一般的にも観察され、吃的非流暢性と言われている。

(3) 非意図的な語句の要素の繰り返しが見られる非流暢性は、吃音者にも非吃音者にも観察される。その同形態の非流暢性の音声の移行に着目して、日本語(京阪、東京方言)、英語(米語)、中国語(北方方言)の成人吃音者と非吃音者約 600 名の自然発話から収集した非流暢性約 5000 例とその背景の発話 16,000 例の統計分析結果による蓋然性から、1)この種の非流暢性は語句頭に生起する。2)吃音者は共鳴音から阻害音へ、または阻害音から共鳴音への音声の移行で非流暢性を誘発し、非吃音者は共鳴音同士の音声の移行で非流暢性を発する。3)非流暢性は個別言語の主要な音韻単位(リズムの単位)に影響を受け、その単位を繰り返す。以上のことが明らかになっている。

(4) 発達性吃音者は、非吃音者とは異なる特徴を脳機能や運動機能に有している。脳では運動野と言語中枢も含む他の部位との接続が低下しており、誘発脳波の反応からも情報の脳内処理に問題があると言われている。また運動機能も複雑な処理には弱いことが実験から明らかになっている。

(5) 吃音と吃的非流暢性を判別する評価法として、語彙の繰り返しとその指標となるという主張がある。これは英国 UCL の P. Howell 教授が、機能語の語彙の繰り返し、彼の EXPLAN 理論から、非吃音の非流暢性の典型とした吃音評価である。しかし日本語では、統語構造から、語句末に位置する機能語の繰り返しが見れない。繰り返し部分をもつ非流暢性は語句頭で生起するからである。

(6) 機能性構音障害で定型の調音(構音)獲得が遅れのあるものは、対応しやすい障害であるが、獲得の道筋(順序)から外れたものは対処しにくい。

(7) 線状のプロセス分析で機能性構音障害を定式化すると、人間の言語獲得や言語処理にはあり得ない負の規則を設定することになり、妥当性を欠く記述になる。

(8) 現在の音韻論につながる非線状音韻論の分析に従い、最適性理論から、制約の序列の変化が言語発達を反映していると考えられることができる。また不完全指定理論を用いると線状音韻論では記述できなかった非流暢性を分析することができる。

2. 研究の目的

(1) 先行研究の不備を補正し、発話の非流暢性の要因に結びつく言語学的・音声学の側面の発見や定説に新たなエビデンスを提示するとともに、新側面も探求する。

(2) 言語に現れる症状の分析から、吃音や機能性構音障害の客観的な評価や効果の根拠を備えたセラピーモデルを構築する。

(3) 世界の吃音研究、発達・構音障害の研究に影響力を持つ著名な研究者を海外から招き、国内の複数の地域で講演会や研修会を催して学び、社会への啓蒙と広報も実践する。

3. 研究の方法

学際的な研究なので、言語学・音声学の手法と医学的な脳機能の実験的手法と言語障害の臨床的手法とは異なるところがある。しかし共通するのは、逸脱した現象と正常と見なされる現象を比較・対照して、逸脱を記述し、その要因を探求するところである。そしてまたそこから逸脱の矯正手法を探求する。

(1) 音声学や脳機能画像による分析や言語障害の臨床研究では、被験者として障害者またはその候補と、背景が同量の健常者のコントロールを配置する。そして特定の指標に関する、障害者とコントロールの数値を比較し統計的な検定を経て、その結果が示唆する障害の側面を明らかにする。

(2) 音韻論の理論的な枠組みでの分析は、言語一般での場合と逸脱した場合が、何の指標で異なって現れるかを見る。そこから障害の特徴と評価やセラピーへの手がかりを得る。

(3) セラピーの臨床研究では、認知的、心理的、言語的、音声的、社会的な側面が症状にどのように関係するかを概観的な論評(review)を通し検討する。症例研究では、症状に介入する直接的言語指導で、言語学的・音声学の側面から言語に現れる症状を解消または緩和する手法、また認知的側面から発話に関わる負荷加担を解消する方法を考案する。

4. 研究成果

(1) 研究期間の前半は、これまでの代表者や分担者の研究成果の再検証とそこから見える新局面の開拓に費やした。そしてその総仕上げに、日本音声学会の学会誌、『音声研究』第 17 巻 2 号の全ページを本研究の中間発表の特集とし、代表者、分担者、海外協力者の全員が論文を投稿した。

吃音症状の分析に結びつく研究の一つは、幼児、学童児、成人の吃音者とコントロールの合計 122 名の病的音声の検査結果(APQ, SP の指標のゆらぎが大きい)の統計分析から、幼児と成人吃音者の呼気の喉頭制御が不全であることを明らかにした。また吃音学童児にはその傾向が希薄で、そこが自然治癒の鍵になっている可能性がうかがわれた。これは先行研究の吃音者の音声の移行の特徴とも一致して、複雑な喉頭の操作が音声の移行を

中断する契機になることが示唆されている。

もう一つの研究は、fMRI を用いた脳機能の賦活を見る研究で、成人吃音者 12 名と非吃音者 16 名を、親密度が異なる単語のカタカナ読み上げを通して、脳機能の賦活を吃音者と非吃音者で調べた。結果が示唆するところは、吃音者は音韻連鎖に弱点があるということであった。これも吃音者の音声の移行がうまくいかないことを裏付けていた。

幼児の非流暢性研究では、日英語でその傾向が大きく異なった。吃的非流暢性に関して、日本語では語の繰り返しがなく、英語では機能語の繰り返しが見られる。日本語母語話者は 24 名の吃音と思われる幼児と同数の健常児、日英語の対照研究では日本語が 10 名、英語が 9 名の吃音幼児同士の比較であった。この結果は、DSM-IV や V にある吃音の診断基準の 1 音節語の繰り返し指標や、Howell (2011) の EXPLAN 理論に基づく機能語の繰り返しが非吃音の指標とするその反証のいずれもが日本語には当てはまらない。

吃音の臨床に関する研究では、症状に直接介入する直接的言語指導を洗い直した。症例研究で話者の発音の難易を想定し、難から易への練習に効果があったことを報告している。ただ易から難への訓練と比較対照した結果ではなく、背景も不明であった。吃音を多因子、多側面から評価を行い、セラピーの方向性を決める CALMS モデル(認知: C, 心理: A, 言語: L, 音声: M, 社会: S)をその開発者の E. C. Healey 博士を含めた分担者との共著で、その核心を紹介し検証した。言語、音声の両側面は本研究の成果が生きたところとなるが、他の側面では認知的な側面も重要であることがわかった。

機能性構音障害は、線状のプロセス分析では調音(構音)の獲得段階や構音障害を適切に捉えられないことを確認した。弁別的素性を用いて、入力表示から再検討する必要があるが、素性を的確に用いるモデルがないのが課題であることが明らかになった。

(2)研究期間の後半では、前半の研究成果をどのようにアセスメントとセラピーモデルに組み込めるかを探求した。吃音の CALMS モデルからは、言語的側面と音声的側面と認知的側面からのアプローチを検討した。

言語学的側面では、明らかになっている三つの非流暢性の引き金、言い換えると非流暢性を誘発する指標、を 1)生起位置 2)音声の移行 3)リズムの単位と設定した。これらの指標の力関係、すなわち序列の相違が個別言語で異なっていて、その相違で個別言語の非流暢性の形が決まる。そのモデルの骨子を構築した。この詳細は、同じ研究代表者の挑戦的萌芽研究で追求されている。2)音声の移行は、a. 共鳴音同士の移行、b. 共鳴音から阻害音へ、c. 阻害音から共鳴音への移行と細分され、a. 共鳴音同士の移行が序列上位となると非吃音者の非流暢性、b. または c. が上位にくると吃音者の非流暢性となる。すなわちこの音声

の移行の細分化された序列を見れば、吃音者と非吃音者の弁別が可能となる。これは個別言語に共通する普遍性のある指標である。すなわちアセスメントの決定的な指標となる。またこの序列を動かすことで、セラピーの方向性が生まれてくる。

音声学的には、病的音声の音響分析検査から、その発音が吃音に結びつくかどうかの予想が可能である。これもアセスメントの重要な指標となる。この検査結果が陽性であれば、発話開始時の呼気の調整に関わるセラピーが必要となる。

認知的には、発話開始時の阻止を認知行動で回避すれば、この種の吃音は解消される。背景には吃音者の発音リハーサル想起がある。発話にこのリハーサルが組み込まれているので、音声プランに音韻情報の過度な負担が付加される。その負担を認知行動療法で取り除くのである。これは症例として複数の成功例をあげている。但し繰り返しが現れる症状には効果が薄い。

吃音のアセスメントでは、言語学的には音声の移行、音声学的には母音発声による病的音声検査で、発達性吃音の可能性を評価する。主に幼児・学童児の吃的非流暢性を対象にそのアセスメントモデルの骨子を組み立てた。

また吃音セラピーでは直接的言語指導で、語句頭に吃音者の非流暢性に結びつく音声の移行を置くモデルと逆に吃音者には楽な音声の移行を置く発話練習モデルの枠組みを作成した。また発話開始に問題を持つ話者には残留呼気で発話を開始する方法を上記モデルに組み込んだ。発話開始が阻止で困難な話者には、認知行動療法で発音リハーサルを抜く工夫を提示するモデルも作成した。

定型発達の道筋から外れた機能性構音障害には、非線状音韻論の不完全指定理論を導入し、言語に存在する不完全指定と比較対照した。日本語の撥音やピダハン語の分節音は不完全指定と考えられる。障害の不完全指定と言語のそれとの相違は、言語にはその補完システムがあるが、障害にはそれが無い。また言語のそれは place(場所)の素性であるが、障害は root(主要音類素性と調音法に関する素性)の素性である。障害におけるセラピーの方向性として、指定がある素性から問題の素性を指定する試みを示した。また日本語に合う音韻素性の体系も提案した。

カナダのプリティッシュコロンビア大で試みられている、音韻理論を導入した日本語も含む 11 言語に共通する発達と構音障害のアセスメントの評価シートを紹介し、許可を得て公開した。

(3)海外からは 4 名の著名な研究者、臨床家を招き、講演会・研修会を参加費無料、通訳付きで実施した。最初に、「多面的モデル」を提唱している第一人者で、CALMS モデルによるアセスメント・臨床アプローチを確立した米国ネブラスカ大学リンカーン校教授の E. Charles Healey 博士を、2011 年 12 月に

招聘した。広島（広島大学）と福岡（福岡教育大学）と大阪（大阪医療福祉専門学校）で「CALMS モデルによる吃音のアセスメントと臨床」と題する3時間余の講演会を開催し、合計300名余の聴衆を集めて、最先端の吃音アセスメントからセラピーへの道筋を紹介し、聴衆からの質疑にも応答した。

2014年2月には、カナダのプリティシュコロンビア大学から言語学科教授の J. P. Stemberger 博士と言語病理学・音声科学院教授の B. May, Bernhardt 博士を招聘した。言語発達と構音障害のアセスメントを、音韻論が専門の Stemberger 博士が非線状音韻論を介入させて、枠組みを作り、言語病理学が専門でスピーチセラピストの May, Bernhardt 博士がそれを臨床で応用する試みがなされている。現在進行中の日本語も含む11言語に共通する発達と構音障害のアセスメント構築プロジェクトの中心でもある。「音声学・音韻論は構音・音韻障害の臨床をどうかえるか？音声学・音韻論が強化するセラピーの効果：音声学・音韻論の役割」と題する講演会を、大阪（大阪大学豊中キャンパス）、浜松（浜松市研修交流センター）、広島（広島大学）で開催した。各博士の演題は、「その1理論、幼児・学童児の言語獲得に関する情報も含む」「その2応用、どのようにセラピーに応用するか」で、合計3時間余であった。聴衆は合計250名余りで、活発な質疑応答があった。

最後は、2014年の春に研究の集大成をテキストとして出版したばかりの、イリノイ大学名誉教授 Ehud, Yairi 博士を2014年11月に招聘して、現時点までで吃音に関して明らかになっていることをまとめて講演していただいた。演題は「吃音の研究と臨床の進歩について」である。会場は新潟（朱鷺メッセ）、埼玉（国立障害者リハビリテーションセンター）、福岡（福岡教育大学）で、合計300人余の聴衆があった。また京都で研修を兼ねて、ことばと聞こえの教室の教員で組織する京都言語障害研究会の会員との交流をもった。

<引用文献>

Archangeli, D., Aspects of underspecification theory, *Phonology* 5, 1988, 185-207
Howell, P., Recovery from Stuttering, 2011, New York: Psychology Press
Stemberger, J.P. & Bernhardt, B.M. 音声学・音韻論が強化するセラピーの効果：音声学・音韻論の役割、日本講演資料、2013
氏平 明、ピダハン語、日本語、そして機能性構音障害、豊橋技術科学大学最終講義資料、2013
氏平 明、吃音の言語学的・音声学的特質、生存学 8, 2015, 161-177
Yairi, E., 吃音の研究と臨床の進歩について、日本講演資料、2014
その他：以下の5. 主な発表論文等

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計19件)

川合紀宗、新版構音検査と併用可能な音韻プロセス分析ツールの開発、音声言語医学、査読有、52巻、2011、pp.348-359

DOI:ISSN 0030-2813

川合紀宗、アメリカ合衆国の学校教育現場における言語聴覚士の役割と課題、コミュニケーション障害学、査読有、28巻、2011、pp.128-136

DOI:ISSN 1347-8485

渡邊正基、見上昌睦、読みの問題のある吃音児に対する音読指導、聴覚言語障害、査読有、41巻、2012、pp.45-53 DOI:ISSN 03000338

Kawai, N., & Carrell, T.D., Discrimination of differences in digitally manipulated phoneme length during speech, *Perceptual and Motor Skills*, 査読有、114, 2012, pp.189-203, DOI:ISSN 0031-5125

Kawai, N., Healey, E.C., Nagasawa, T., & Vanrychehem, M., Communication attitude of Japanese school-age children who stutter, *Journal of Communication Disorders*, 査読有、45, 2012, pp.348-354 DOI:ISSN 0021-9924

Kawai, N., Healey, E.C. & Carrell, T.D., The effect of duration and frequency of occurrence of voiceless fricatives on listeners' perceptions of sound prolongations, *Journal of Communication Disorders*, 査読有、45, 2012, pp.161-172 DOI:ISSN 0021-9924

川合紀宗、松谷曲枝、ダウン症児の構音指導に関する事例研究 /s/・/dz/の改善に向けて一、広島大学大学院教育学研究科紀要第1部(学習開発領域)、査読無し、61巻、2012、pp.169-178 DOI:ISSN 1346-5546

氏平 明、発声時の振幅のゆらぎに見る吃音者と非吃音者、音声研究、査読有、17巻2、2013、pp.4-20 DOI:ISSN 1342-8675

上田 功、機能性構音障害の音韻分析 臨床的視点からの考察、音声研究、査読有、17巻2、2013、pp.21-28 DOI:ISSN1342-8675

森浩一、蔡暢、岡崎俊太郎、岡崎美苗、カタカナ単語読み上げの神経機構と発達性吃音成人の脳活動パタンの特徴、音声研究、査読有、17巻2、2013、pp.29-44 DOI:ISSN 1342-8675

見上昌睦、吃音の進展した学齢児に対する直接的言語指導に焦点を当てた指導、音声研究、査読有、17巻2、2013、pp.45-57 DOI:ISSN 1342-8675

E.Charles Healey and Norimune Kawai, Implication of a Multidimensional Model of Assessment for the treatment of Children who stutter, 音声研究、査読有、17巻2、2013、pp.58-71 DOI:ISSN 1342-8675

坂田善政、氏平 明、餅田亜希子、吉野眞

理子、日本語における吃的非流暢性の特徴
幼児の発話サンプルによる検討、音声研究、
査読有、17巻2、2013、pp.72-82 DOI:ISSN
1342-8675

Matthew Smith and Peter Howell、
Stuttering Patterns in Japanese and
English Preschool-Aged and School-Aged
Children-as a Progress Report-、音声研究、
査読有、17巻2、2013、pp.83-89 DOI:ISSN
1342-8675

Ueda, I., On the nature of functional
misarticulation in Japanese, Proceedings
of The 5th International Conference on
Phonology and Morphology, 査読有、1、2014、
pp.97-109

<http://www.phonology.or.kr/xel/?module=file>

氏平 明、最新の構音障害の臨床 音声
学・音韻論の視点から、コミュニケーション
障害学、査読有、32巻2、2015、掲載確定、
DOI:ISSN1347-8485

Chu, S.Y., 酒井奈緒美、小倉(青木)淳、森
浩二、吃音のある成人へのビデオセルフモデ
リングによる介入の試み：主観的評価で見た
有用性、音声言語医学、査読有、55巻1、
2015、pp.20-29 DOI:ISSN 0030-2813

Vanryckeghem, M. & Kawai, N., Evaluation
of speech-related attitude by means of the
KiddyCAT, CAT and BigCAT within a larger
Behavior Assessment Battery framework for
children and adult who stutter, 広島大学
大学院教育学研究科附属特別支援教育実践
センター研究紀要、査読無し、第13巻、2015、
pp.1-9 DOI:ISSN 1884-5406

坂田善政、成人吃音の臨床、言語聴覚研究、
査読有、2015、掲載確定、
DOI:ISBN978-4-260-00626-2

〔学会発表・招待講演〕(計 31件)

1 氏平 明、共通基盤の音声表記を目指して、
第35回口蓋裂学会(招待講演)、5月26日、
2011、新潟県新潟朱鷺メッセ

2 氏平 明、音声プランニングとその実現、
2011年福岡県士会秋の講演会(招待講演)、
11月6日、2011、福岡県北九州市立総合療育
センター

3 見上昌睦、吃音の進展した小学校高学年児
に対する指導、第37回日本コミュニケーション
障害学会学術講演会、5月28日、2011、
長野県長野市JA長野県ビル

4 見上昌睦、小学校高学年から中学校期に指
導を行った吃音事例、日本特殊教育学会第49
回大会、9月24日、2011、青森県弘前市弘前
大学文京町キャンパス

5 Mori, K., Cai, C., Okazaki, S., & Okada, M.,
Neural substrates for speech production in
normal and developmental stuttering
speakers, 6th International Conferences on
Speech Motor Control, 6月8日~11日、2011、
Groningen Netherlands

6 森浩二、第6回国際発話運動制御国際会
議(オランダ)に参加して、第8回吃音を語
る会(招待講演)、8月21日、2011、東京都
東京上野水月ホテル鷗外荘

7 氏平 明、吃音の診断基準とセラピーの可
能性について、第2回吃音フォーラム in
Nagoya(招待講演)、11月4日、2012、愛知
県名古屋市北区役所ホール

8 Isao Ueda, Two types of rhoticism in
Japanese: From a clinical perspective,
ICSLP 2012(14th International Clinical
Phonetics and Language Association), 6月
27日~30日、2012, UCC Cork Ireland

9 森浩二、成人吃音の認知行動療法、第57
回日本音声言語医学会総会・学術講演会、10
月19日、大阪府大阪市大阪国際交流センタ

10 森浩二、吃音の認知行動療法、京都言友
会(招待講演)、7月16日、2012、京都府京
都市聴覚言語障害センター

11 見上昌睦、吃音が進展し構音障害を伴う子
供に対する指導、第38回日本コミュニケー
ション障害学会学術講演会、5月12日、2012、
広島県三原市広島県立大学三原キャンパス

12 見上昌睦、吃音が進展したダウン症児に対
する指導、第57回日本音声言語医学会総会・
学術講演会、10月19日、2012、大阪府大阪
市大阪国際交流センター

13 坂田善政、餅田亜希子、氏平 明、吉野眞
理子、吃的非流暢性の特徴 幼児の発話サン
プルによる検討、第39回日本コミュニケー
ション障害学会学術講演会、7月20日~21
日、2013、東京都上智大学

14 坂田善政、Lidcomプログラム導入に伴って
症状が悪化した幼児吃音の1例、第1回日本
吃音・流暢性障害学会、9月21日~22日、
2013、石川県金沢市金沢大学

15 見上昌睦、学齢期吃音に対する直接的言語
指導を核とした多面的指導、第39回日本コ
ミュニケーション障害学会学術講演会、7月
20日~21日、2013、東京都上智大学

16 Masamitsu Kenjo, Multidimensional
approach of school-age Japanese children
who developed stuttering focusing on
direct treatment, 29th World Congress of the
International Association of Logopedics
and Phoniatrics, 8月27日、2013, Lingotto
Congress Centre, Torino Italy

17 氏平 明、明日から使える臨床の音声学・
言語学、新潟県士会研究会(招待講演)、12
月7日、2014、新潟県新潟総合福祉会館

18 見上昌睦、吃音の進展した小学校中学年児
に対する指導 コミュニケーション態度の
変容、第40回日本コミュニケーション障
害学会学術講演会、5月10日、2014、石川県
金沢市金沢大学室町キャンパス

19 森浩二、成人の難発解除を日常生活に汎化
させる試み、第59回日本音声言語医学会総
会・学術講演会、10月9日~10日、2014、
福岡県福岡市 アクロス福岡

20 森浩二、認知行動療法、第2回吃音・流暢

性障害学会シンポジウム(招待講演)、8月30日、2014、埼玉県目白大学

21 Ueda, I., On the nature of functional misarticulation in Japanese, The 5th International Conference on Phonology and Morphology(招待講演)、7月4日、2014、韓国 クアンジュ

22 Ueda, I., Tautosyllabic vowels as an indicator of liquid acquisition: A case study in Japanese, The 9th Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing, 11月1日、2014、台湾 タイチエン

23 Ueda, I., Tabata, Y. and Yamane, N., Some functional misarticulation system in Japanese, knowledge Mobilization for an International Crosslinguistic Study of Children's Speech Development, 8月7日、2014、カナダ バンクーバー

24 川合紀宗、日本版 CALMS 評価スケール試案の開発、日本特殊教育学会第52回大会、9月20日、2014年、高知県高知市高知大学

25 川合紀宗、CALMS 評価スケール試案を使用した吃音のアセスメント、第59回日本音言語医学会総会・学術講演会、10月9日~10日、2014、福岡県福岡市 アクロス福岡

26 坂田善政、Lidcombe プログラム導入後に改善した幼児吃音の1例、第2回吃音・流暢性障害学会、8月30日、2014、埼玉県目白大学

27 氏平 明、最新の構音障害の臨床 音声学・音韻論の視点から一、第41回日本コミュニケーション障害学会学術講演会(招待講演:会長推薦講演)、5月17日、2015、福岡県福岡市福岡大学

28 氏平 明、言語の普遍性と個別性を考慮した言語障害の症状の解明とそのセラピーの探求 吃音の周辺について一、第41回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、吃音および流暢性障害分科会(招待講演)、5月17日、2015、福岡県福岡市福岡大学

29 Kawai, N., Listeners' Perceptions of Digitally Manipulated Silent Hesitations: the Boundary between Fluent vs. Stuttered Speech, The 8th World Congress on Fluency Disorders, 7月6日、2015、Catholic University of Portugal Lisbon

30 川合紀宗、吃音臨床の最前線、第3回吃音・流暢性障害学会(招待講演)、8月29日、2015、大阪府大阪市大阪保健医療大学

31 坂田善政、吃音のある幼児と成人の指導・支援の実際、石川県言語聴覚士会研修会(招待講演)、2月22日、2015、石川県金沢福祉子供医療センター

〔図書〕(計 5 件)

Ueda Isao and Saito Hiroko, Tonic misplacement by Japanese learners in English, *Exploring English Phonetics* 2011, pp.73-75, (総ページ251)

加藤正子、竹下圭子、大伴潔、斎藤純男、

山下友加里、高見葉津、石田宏代、見上昌睦、特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と指導、学苑社 2012、pp.226-246、(総ページ250)

川合紀宗、坂田善政、見上昌睦 他15名、特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と指導、学苑社 2013、(総ページ246)

上田 功、機能性構音障害の音韻体系は「自然」なのか? 江藤浩樹他編『より良き代案を絶えず求めて』、開拓社 2015、(総ページ546)

菊池良和、川合紀宗、小林宏明、原由紀、宮本昌子、坂田善政、酒井奈緒美、小児吃音臨床のエッセンスー初回面談のテクニック、学苑社 2015、印刷中

〔その他〕ホームページ等
<http://ujihira.my.coocan.jp>

6. 研究組織

(1)研究代表者 氏平 明

(UJIHIRA AKIRA)

新潟リハビリテーション大学・医療学部・
客員教授 研究者番号:10334012

(2)研究分担者 上田 功

(UED ISAO)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授
研究者番号:50176583

(3)研究分担者 森 浩一

(MORI KOICHI)

国立障害者リハビリテーションセンター(研
究所)・部長 研究者番号:60157857

(4)研究分担者 見上昌睦

(KENJO MASAMUTSU)

福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号:30279591

(5)研究分担者 川合紀宗

(KAWAI NORIMUNE)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授
研究者番号:20467757

(6)研究分担者 坂田善政

(SAKATA YOSHIMASA)

国立障害者リハビリテーションセンター(研
究所)・教官 研究者番号:20616461

(7)研究協力者 太田貴久

(OTA TAKAHISA)

豊橋技術科学大学・知識情報工学系・研究員
(8)研究協力者 脇 豊明

(WAKI TOYOAKI)

元京都市小学校教員(ことばの教室)

(9)海外研究協力者 Dr.Peter Howell
ロンドン大学(UCL)・心理言語科学研究科・
教授